

## 令和元年度中堅職員海外研修の実施について

令和元年度中堅職員海外研修について、下記のとおり実施いたしました。

※本研修は、世界保健機関（WHO）によって新型コロナウイルスの感染拡大がパンデミック（世界的大流行）であると宣言される前に実施したものです。

### 1. 研修者

中堅程度までの職歴を有する専任職員 6 名

### 2. 研修期間

令和 2 年 1 月 1 2 日（日）～ 2 9 日（水）（1 8 日間）

### 3. 研修先

フィリピン、オーストラリア、シンガポールの大学及びその他の高等教育機関等

### 4. 研修テーマ

近年の我が国では、急速にグローバル化が進み、今後さらなる進展が予測される。大学は国際的な視点を持って大学運営を行うことが求められており、本学の国際性について、より一層、真摯に検討していく時代が到来していることから、海外の高等教育機関における最新の動向を知るとともに正しく理解することが本学職員に求められている。

本研修では、本学の国際化及び国際競争力の向上にむけて、海外の高等教育機関等への視察を通じて、本学職員が大学運営に携わる一員として見聞を広め、本学の発展に貢献しうる人材に成長することを目的とする。

### 5. 実績概要

研修を通じて、「本学の発展に寄与するための国際化の推進に向けた国際性向上の必要性についての考察」という課題に取り組んだ。渡航にあたり、事前研修及び事後研修が実施され、事前研修においては、渡航国における高等教育システムに関する調査が行われ、事後研修においては、研修における経験及び研修先への視察を通じて得られた知見などをまとめた報告書が作成された。

報告書の作成にあたり、本学の国際化の推進及び国際性の向上に関する検討・議論がなされ、本学の国際化を考えるにあたり、「教育」、「学生」、「職員」、「国際展開」、「研究」の五つの項目に対して考察がなされた。

「教育」では、研修先の大学における学生との交流から得られた知見を中心に、国際性を高める教育とは、いかなるものかについて考察がなされ、多様性を意識した教育について具体的な例を挙げながら示された。

「学生」では、本学の留学生の受け入れ及び海外大学などへの派遣の状況について

整理したうえで、両者を通じた学修環境の変化及び学生の多様化について、並びに、学生の日本大学マインドの醸成との関連について、研修先において得られた知見をもとに論じられた。

「職員」では、大学の国際化にあたって、大学が職員の国際性の醸成のために柔軟な姿勢を持つことについて、また、学生に対峙する存在として、同時に、グローバル化社会における一人の社会人として、職員が高い国際性を備えることについて、その重要性が論じられたほか、それらをより推進していくための方策について、研修先における具体例を示しながら論じられた。

「国際展開」では、大学の国際化という論点のなかで、国際展開をすることの意義について、研修先で得られた知見をもとに考察がなされた。

「研究」では、オーストラリアにおける研究力の向上について、また、研究者の評価方法について、研修先で得られたデータをもとに考察し、大学の国際化及び研究力の相関について論じられた。

総じて、報告書において導かれた結論は、次のとおりである。

本学の国際化の推進及び国際性の向上には、国内外から広く優秀な学生・教員・研究者を集め、大学の教育・研究機能を強化することが必要であり、その際に国境を障壁とせず実施することが、大きな課題であるということ。これらの課題解決のためには、本学の国際性を高め、彼らを受け入れる環境を整備することが必要であり、それが整った状態が、一つの国際化された状態といえるであろうということ。

次に、受け入れのみならず、学生の留学、教員の海外派遣、大学の海外拠点の運営など、国境を越えた活動についても、今後、強化していく余地がある。一方で、自国においても国際的な様々な側面を取り入れることも国際化への手段として検討が必要である。すなわち、海外及び国内の双方において、国境を越えて大学の活動が行われていることが、総じて大学の国際化を発展させることになるといえ、トランスナショナル高等教育について論じられているなかで、本学においてもトランスナショナルな、あるいはボーダーレスな教育及び研究活動が活発に行われていくことが望ましい。

中央教育審議会「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」答申を踏まえて、大学が、多様な価値観を持つ、多様な人材が集まることにより新たな価値が創造される場として存在することを求められるのであれば、その創造のために、本学の機能そのものが国際化していく必要があり、教育及び研究をはじめとした多くのセクションで国際性を高め、各セクションが有機的に連携することで、大学全体の国際化が図られるといえる。

最後に、各大学の教学部門、研究部門、管理部門といった多岐にわたる部署の関係者にヒアリングし、意見交換を行ったことは、多彩な角度から体系的に大学の運営について考察する契機となった。国際展開について具体的な運用方法を学ぶとともに、各部門における国際化に関連した実務についての意見交換を通じて、各大学の国際化について状況を把握することができた。

また、大学以外の高等教育機関等への視察を通じて、大学内の視点からだけではな

く、各国の高等教育システムの枠組のなかで、大学の有する機能について考察し、各国の最新の高等教育事情について理解を深めることで、本学の国際化について整理し検討するための知見を得ることができた。

以 上